

Title	福沢諭吉関係新資料紹介
Sub Title	Letters by Fukuzawa Yukichi
Author	福沢研究センター(Fukuzawa kenkyu senta)
Publisher	慶應義塾福沢研究センター
Publication year	2010
Jtitle	近代日本研究 (Bulletin of modern Japanese studies). Vol.27, (2010.) ,p.177- 185
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	資料紹介
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-20100000-0177

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

福沢諭吉関係新資料紹介

福沢研究センター

I 福沢諭吉書簡

『福沢諭吉書簡集』（岩波書店 平成十三～十五年 以下『書簡集』と略す）未掲載で、『近代日本研究』第二十六巻刊行以降見出された書簡を載録する。掲載は発信年月日順とし、体裁はすべて『書簡集』の形式に従った。主な原則は次の通りであるが、詳しくは『書簡集』第一巻所収の凡例を参照されたい。なお、書簡番号は『書簡集』の番号を追うものである。

凡例

一、常用漢字は、原則としてその字体を用いたが、慶應義塾など若干の固有名詞には、原文の字体を残した場

合もある。

二、異体字、俗字、或いは書き誤りかと思われる文字は、正体に直した。

三、仮名づかいは、原則として原文のままとした。ただしひら仮名・かた仮名の判別がつかない文字は、かた仮名で表記した。

四、変体仮名はひら仮名に改めたが、助詞として用いられている次の文字は、原文の字形を残し、小活字右寄せで印刷した。は(も)、て(而)、え(に)

原文が確認できない書簡の場合も、漢字の字体で表記されている「者」「而」「江」が助詞として使われている場合には、右の字体を用いた。

五、濁点・半濁点は原文のままとした。

六、合字は、使用頻度の高いカ(より)、メ(しめ)は原文の字形を残した。頻度の低いハはトキ、凡はトモ、フはことと表記した。

七、原文では句読点はほとんど打たれていないが、編者の判断により適宜これを補った。

八、宛名や発信年月日が推定でしか示すことができないものには、「カ」を付した。

九、本文の後、後注の前に【】を付して書簡の大意を示した。

十、封筒に関する事項は、書簡の理解に必要と判断されるものだけに限った。

(西沢 直子)

二六〇二 藤田茂吉カ 明治十一年十月十日

要用

榎本氏此度陸路ニ而魯西亞より帰り、兩三日之中着京之筈なり。就而ハサイベリヤ之紀行ハ、新聞紙ニ屈強之種なり。諸新聞屋カ必ス手を入レテ借用を乞ふ事ならん。依而思ふ。報知社ハ未タ氏ノ帰らぬ前より、年寄を以て留住宅申込置候様被成度。栗本先生杯ハ必ス御縁も可有之、怠たらぬ様いたし度事ニ御座候。尚御都合次第ニ而小生方も申遣置不苦候。別紙ハ雜報ニ御出し被下度御頼申候。

右要用而已、早々頓首。

十月十日

【シベリア經由で帰国する榎本武揚の紀行文を得るべく、郵便報知新聞社で早くから準備するよう勧める】

○「榎本」は榎本武揚。明治七（一八七四）年に海軍中将兼特命全權駐露公使に任命され、翌年ペテルスブルクにおいて日露樺太・千島交換条約に調印した。十一年十月帰国。○「サイベリア之紀行」はシベリア紀行。書簡前段に「陸路」とあるように、榎本は帰国の際シベリアを馬車で横断した。各新聞社がこぞって紀行文を欲しがらうと予想している。○「報知社」は郵便報知新聞社。五年六月の創刊で、七年六月に栗本鋤雲が主筆になると、福沢諭吉はその要請を受けて協力、門下生の藤田茂吉、箕浦勝人、牛場卓蔵が入社した。○「年寄」とあるのは母琴のことか。福沢は戊辰戦争後収監されていた榎本の救援に奔走し、琴に代わって兵部省への嘆願書の案文を作成したこともある。『福沢諭吉全集』第二十卷（慶應義塾、昭和四十六年再版、岩波書店）○「栗本」は栗本鋤雲。文政五（一八二二）年幕府医官喜多村槐園の三男に生まれ、幕府奥詰医師栗本家の養子となった。昌平黌や古賀洞庵、佐藤一斎のもとなどで学び、また医学は曲直瀬養安院に学んだ。一時蝦夷移住を命じられたこともあったが、幕末の重要な政局で軍艦奉行、外国奉行、勘定奉行、箱館奉行などを務め、慶応三

(一八六七)年に渡仏。滞仏中に幕府が瓦解し、明治元(一八六八)年に帰国後は帰農したが、五年に横浜毎日新聞社入社、翌年郵便報知新聞社に主筆として移り、十八年まで勤務した。二十五年に福沢が「瘠我慢の説」を執筆し送ると、その内容に賛同し非常に喜んだ。三十年三月六日歿。『書簡集』第七卷(ひと)。○「別紙」は残っていない。○宛先部分は残っていないが、書簡の内容や一緒に藤田茂吉宛福地源一郎書簡が残っていたことなどから、藤田茂吉と推察される。○発信年は榎本の帰国から明治十一年であることがわかる。○個人蔵。

二六〇三 山東直砥

明治十三年八月二十一日

拝見仕候。陳ハ過日御話之一条ハ即日先方へ参り、い才面談いたし候。実ハ其節特ニ御返詞可申上筈候得共、翌日ハ大江君ガ御話可相成様伺居候ニ付、果して何とか響き候事と存し等閑打過し候。唯今御手紙之趣い才拝承、尚試ニ談し可申。実ハ甚困難事成否難期候得共、意を達する丈ケハ勉メ可申奉存候。何れ拝顔万々可申上候。早々拝答

八月廿一日

論 吉

山東先生侍史

【「過日御話之一条」(高島炭鉱買収の一件か)が簡単には進まないことを述べる】

○山東直砥は、天保十一(一八四〇)年和歌山藩士の子として生まれ、大阪で学んだのち、京都で伴鉄太郎に入門。慶応二(一八六六)年箱館に赴きロシア語を学び、四年から箱館裁判所(のち箱館府)で働く。明治二(一八六九)年に、柳田藤吉が東京早稲田に創設した北門社新塾を託され赴任したが、四年神奈川県参事に転じ、八年辞職。西南戦争の際、陸奥宗光らのクーデターに加担したが処罰を逃れ、十一年には和歌山県粉河に陸奥や見玉仲間たちと猛山学校を開設した。三十七年二月十四日歿。『書簡集』第三卷(ひと)。○「過日御話之一条」は、これまでに知られている山東直砥宛福沢諭吉書簡のうち、

明治十二年八月十五日付、十三年カ三月一日付、十三年四月十日付（書簡番号六七、四七、四六）から、三菱による高島炭鉱買収の一件のことと思われる。○「大江君」は大江卓。弘化四（一八四七）年土佐国幡多郡に生まれる。五年神奈川県権令となり、マリア・ルーズ号事件を処理した。七年大蔵省に出仕するが、免官となり、西南戦争に際しクーデターを企て、一年に禁獄十年の判決を受けた。後藤象二郎の次女と結婚し、後藤が所有していた高島炭鉱の整理にも奔走している。大正十（一九二二）年九月十二日歿。

二六〇四 島村こう

明治十六年カ七月七日

出板舎へ勘定為致候処、別紙之通り相成、差引残金

貳千九百四拾貳円二十六銭貳厘

ハ、七月一日カ私方へ取寄、紙幣二帀風呂敷二包ミ仕舞置候。札二帀御渡し候とも、又ハ公債証書を買入候とも御差図次第二可致。但し証書ハ当節非常之高直ゆゑ如何候哉。尚其方様二帀御相談被成度候。早々頓首。

七月七日

福澤

島村様

【慶應義塾出版社への預かり金の返却について知らせる】

「封筒表」東京小川区春日町五十番地 島村おこう様 「封筒裏」封 三田 福澤出ス

○島村こうは、島村鼎甫夫人。島村鼎甫は福沢論吉とは適塾の同窓生で、天保元（一八三〇）年備前国上道郡の生まれ。阿波藩医、幕府医学所教官、大学東校中教授などを務め、明治六（一八七三）年以降は翻訳著述に従事した。十四年二月二十五日歿。○「出版舎」は慶應義塾出版社。明治以降出版業にも従事していた福沢は、五年に慶應義塾出版局を設立し、七年合資会社慶應義塾出版社となった。島村鼎甫は生前慶應義塾出版社に金を預けていたようで、歿後福沢は遺族の要請を受け

てその返却に尽力している。明治一十六年カ四月六日付、同八月二日付、同八月カ十九日付、同八月二十九日付（書簡番号三〇、
三九、七三、七五）参照。○発信年は、前掲関連書簡が明治十六年と推定されていることから、本書簡も同年と考えられる。

二六〇五 吉田賢輔

明治二十一年十一月十七日

【福沢一太郎・捨次郎の帰国祝いの園遊会への招待状 *書簡三三五と同文につき本文省略】

〔封筒表〕下谷区下谷竹町十番地 吉田賢輔様 〔封筒裏〕^(印)絨 東京芝三三田二丁目二番地 福沢諭吉

○吉田賢輔は、天保九（一八三八）年江戸生まれの洋学者。初め定吉、諱は彦信、号は竹里。田辺石庵、古賀茶溪に学んだ。また英書も学び、万延元（一八六〇）年に蕃書調所書記、同所翻訳書記取締となつて以後、外国奉行支配書記、同支配調役並、儒者勤方などを務め、明治以降は慶應義塾や尺振八の共立学舎で教鞭をとつた。五（一八七二）年大蔵省に出仕し、七年同省紙幣寮で『大日本貨幣史』を著した。また十五年には文部省で『日本教育史』の編纂にも携わつた。二十六年十月十九日歿。○園遊会当日の様子は書簡三三三に詳しい。○書簡本文は印刷、宛名および封筒表は代筆、封筒裏は印刷。

二六〇六 吉田賢輔

明治二十二年十一月二十一日

過日ハ御使被下、其節御紙上之趣写真云々之義拝承仕候。則目下あり丈ケ之品差上候。御覽被下候ハ、難有奉存候。弊家ニ而も先月下旬カ、長女さと事大病ニ而一時ハ迎も六ヶ敷ものと存候程之次第ニ御座候処、幸ニ万死中之一生を得て、昨今ハ先ツ安心之場合ニ立至候。夫是取込中御使之節も直ニ御返事不仕、不悪御承引可被下候。

昨夜炉辺談笑親 今朝病床看酸辛

家門多福君休道 吾羨世間無子人

医略旬余与病争 攻防謀得告功成

吾家慶事人如問 廿二之児今日生

御一笑可被下候。御承知之さとも中村貞吉方へ嫁して既二男を生み、今年廿二歳ニ相成、殆んと死して恰も再生致候次第、老生夫婦相始め一家皆喜ふのみニ御座候。

十一月廿一日

諭 吉

吉 田 先 生 侍 史

【長女さとの全快を伝える】

○「長女さと」は中村里。明治二十二年十月十七日に、当時流行していた腸チフスに罹り、三十一日から十一月一日にかけては重篤に陥ったが、全快した。福沢諭吉は大変心配し、そのことを詩により、また全快するとその喜びを、この慶事について人から尋ねられたら、二十二歳の子どもが誕生したと答えようとうたっている。○中村貞吉は、三河豊橋藩士山本直孝の三男で、同藩士中村清行の養子。三年六月に慶應義塾に入学し、のち工部大学校に学んだ化学者。○「二男」は愛作と壮吉。

以下の書簡は、『書簡集』掲載時には原本との校訂ができず、やむなく『福沢諭吉全集』再版（岩波書店、昭和四十四～四十六年）から採録したが、このほど原本が判明し校訂作業を行うことができた。注については『書簡集』該当頁を参照されたい。

三六一 高木喜一郎

明治二十二年一月二十六日

本月二十二日附之貴翰、夏目氏か入手拝見仕候。陳ハ其出張所會計之義ニ付、縷々詳細逐一承知致候。御用繁之御中態々御報道被下実ニ感謝ニ不堪、老生義ハ之を連名之人ニ示す前ニ一ト通り了解せんものと存し、唯今拝見し終りたる処ニ御座候。是れより坂田并ニ伊藤諸氏へ見せて篤ト相談、其上ニ御返詞可仕、何分にも今後共綿密ニ御注意奉願候。

右不取敢御返詞まで申上度、余ハ附便候。^{（後脱カ）}早々頓首。

二十二年一月廿六日

高木様 梧下

論 吉

尚以渡辺治氏ハ近來色々心事多端、政治上ニも所思あるよしニ付、時事新報ハ政党外之ものニ而、之ニ真個の政事^{（家説カ）}が居てハ面白からざるニ付、定式ニ毎日出社することハ断り申候。此段も乍序申上置候。以上。

【書簡集】第六卷一〇〇—一〇二頁

II 断簡

『書簡集』では、活字でしか確認できない断簡については、『福沢論吉全集』（慶應義塾、昭和三十三年）三十一卷、四十四年～四十六年再版全三十一卷および別巻、岩波書店）すでに書簡番号を付与しているものを除き、原則として書簡番号を与えていない。たとえば以下の書簡は『慶應義塾図書館史』（伊東弥之助著 慶應義塾）文中（三七頁）に引用されているが、書簡の体裁では示されておらず、書簡番号は与えられていない。

参考資料 南道亮宛

明治十二年九月二十七日

陳は書籍館設立の義、至極の思召立、世に益あるべきは固より弁を俟たず、唯々困難は其仕組にあるのみ、既に当塾にても或華族より和漢の書幾万巻を預り、此節こそ漸く其目録等も整頓いたし候位の仕合、其際には損じあり、紛失あり、借りて返さざるあり、千種万様の面倒筆紙に記し難し、併し夫れとても真実之を担当する人あれば必ずしも六ヶ敷にあらず、其人を得るは金にあり、此度思召立に付、若し富て仁ある人が多少の資金を投じて之を助成するあらば、急度首尾能参り可申、尚目録の仕組等も数月前本塾にて工夫いたし候ものも有之、是も無資本にて未だ十分には無御座候得共、御入用も候はば大意写取り差上候様為致可申存候。